

1916年閑院宮載仁親王のロシア訪問

—来露100年を記念して—

セルゲイ・チェルニャフスキー

日本はロシアの最も近い隣人であり、我が国はすでに数百年にわたり日本と相互関係を築いてきている。この間における両国の関係は、時にはドラマチックな、時には悲劇的な、様々なかたちをとってきた。しかしながら、しばらくして、一定の時間が過ぎると、ロシアと日本は、変わることなく、協調と善隣の道に立ち戻っていった。その例として挙げられるのが、1905年の日露戦争の終結から1917年ロシアで革命的改変が始まるまでの時期である。

この時期は両国関係に一連の肯定的な変化が生じ、それらの変化は、懸案問題に関しての両国の立場を近づけ、日本とロシアの関係を同盟国の水準にまで事実上引き上げたのである。

1907年、政治的・経済的な性格の一連の協定【ряд соглашений】が締結された【第一次日露協約、日露新通商航海条約】。1910年と1912年にはサンクト・ペテルブルグと東京は包括的政治協約【общеполитические конвенции】を調印し【第二次日露協約、第三次日露協約】、これらの協約により相互理解と協力関係の度合いは更に強化されることとなった。両国の国家関係発展の頂点となったのが、1916年夏の同盟条約【союзный договор】の締結である【第四次日露協約・秘密協定附】。

この条文は双方に対して、政治舞台で互いを敵視したいかなる非友好的行動もとらないこと、また、極東における両国の利益に対する脅威が生じた場合は、その利益擁護に向け共同行動をとることを義務づけた。中国に関して言えば、日本あるいはロシアに敵対的な大国はいかなる国であれ、覇権【господство】を許さないことが条約の大前提とされた。その際、双方のいずれかが【大国との】対決の結果戦争という事態に巻き込まれた場合は、他方は援助に駆けつけることが義務づけられ、また、同盟相手国【союзник】の同意なしには第三国と和平条約を締結することは出来ないことになっていた。

条約の有効期限は5年で【実際には、ロシア革命により1917年3月に破棄。革命政府は「第三国」とは英米であるとの注釈付で公表】、極東における両隣国の関係において真の突破口となるものであった。

まだ条約が締結されていない1915年の秋、皇帝ニコライは、同盟の結びつきを強化するために自分の名代を日本に派遣する決定を下した。名代に選ばれたのは、皇帝の親族であるゲオルギー・ミハイロヴィチ大公であった。一等侍従武官【генерал-адъютант】であった大公は、ニコライ一世の孫、ニコライ二世の従兄弟であるが、当時は大戦のさなかで、皇帝付きとして、大本営にいた。大公の日本訪問には、日露戦争（1904-1905）終結以後最初の（そして結果的には最後の）ロシア皇族の日本訪問であったということで、重要な役割が与えられた。

友好国である日本訪問の目的の一つは、日本の若き皇帝、大正天皇嘉仁の即位を祝うことであったが、即位式が行われたのは1915年の11月であった。同時に、両国共通の敵との流血の戦いを繰り広げていたロシアへの日本の軍事・経済的援助に対し、日本指導部に感謝の意を表することが不可欠であった。ただし、両国の今後に関係する政治的問題については想定されておらず、その

意味で大公の訪問は名代的性格のものであった。とは言え、ゲオルギー・ミハイロヴィチ大公は半月の日本滞在中に少なくとも5回は天皇と会っており、大公の日本訪問は1916年7月の同盟条約締結に向けての良好な土壌を醸成したのであった。

皇帝の引見の場で訓令を受け取った後、1915年12月28日、大公とその随員はシベリア鉄道の特急列車で極東に向けて出発した⁽¹⁾。

1916年1月、大公は日本に到着した。東京駅では、天皇自らが大勢の公人を従えて大公を出迎えた。このような厳かな出迎えは、ロシア皇族の訪問を日本側がいかに重要視していたかを如実に物語るものであった。

訪問そのものは、格別に暖かくかつ友好的な雰囲気の中で行われ、数多くの公式および非公式な行事と同時に、高価な贈り物と褒賞の手交がなされた。それに向けての準備として、大公の日本出発前夜にペトログラード（戦争の開始と同時にサンクト・ペテルブルグを改称）で皇帝官房から「皇帝の名において現地で日本の高官に贈るために、相当数の勲章とメダルが交付された」⁽²⁾。

ロシア側が用意した褒賞のリストには、聖アンドレイ勲章を筆頭とした各種勲章の他に、多くの高価な贈り物が記されている。贈り物の内訳は、宝石付きのものも含め、金・銀の煙草入れ、貴金属製のカフスボタン、ヘアピン、指輪、ブローチとネックレス、時計、酒杯などであった⁽³⁾。

大公と日本側との話し合いの結果、ロシア陸軍への軍備供与について合意がなされ、1916年の夏にロシアと日本の間に同盟条約【**союзный договор**】が締結されたのである。

天皇嘉仁は、この重要な出来事が7月3日にペトログラードで行われたのを受け、ただちに自分の従兄弟である閑院宮載仁をペトログラードに派遣することを決定した。訪問は秋に予定され、1916年の9月に行われた。両国の歴史上特筆すべきこの出来事から今年でちょうど100年を迎える。

当初は、この同盟条約を更に進展させ、軍事協約【**военная конвенция**】をも含めることが予定されており、代表団の中に伯爵・寺内正毅を筆頭とする日本陸海軍の最高指導者を入れる用意がなされていた。寺内正毅伯爵は日本の有名な軍事的・政治的活動家で、初代朝鮮総督（1910-1916）、その後1916-1918年に首相の地位にあった人物である。しかしながら、両国で話し合った後、軍事協約の調印は大戦終結まで延期されることとなり、日本の最高軍事指導者の大部分は代表団には加わらなかった。この間の事情は、しかしながら、閑院宮載仁親王の訪露そのものの重要性和正当性にいささかの影響も与えなかった。

日本皇族のロシア訪問を前にして、大規模かつ徹底的な事前準備がなされた。両国政府とも、この出来事に大きな意味があることを認めていたからである。中でも、閑院宮載仁親王のロシア滞在中の予定について、皇帝の裁可を受けた広範なものが作成された。

この文書の中では、日本の高官が参加してロシアで行われる予定の文字通りすべての行事が、時間と日付ごとに詳細に記載されている。各種行事参列者の名前に至るまですべてが明記され、行事の行われる時間、賓客を乗せた列車が通過する各都市での停車時間、各服装規定なども指示されている。親王の首都滞在中の宿泊先は冬宮とされた⁽⁴⁾。

親王に付き添うために、ロシア側からは、皇帝侍従武官・タチーシチェフ陸軍少将とベザク大佐が任命され、また、侍従武官モルドヴィノフがモスクワから皇帝のいる大本営まで賓客一行を案内することとなった。さらに、ゲオルギー・ミハイロヴィチ大公がモスクワから親王に同行することになった。大公は、日本で敬意をもって受け入れられ訪問を成功裏に終えた後であったの

で、賓客に付き添い、出来る限りの支えとなり、自らの好意を身を以て示すことを自身の義務と見なした。このことは、言うまでもなく、両支配王朝間、すなわち、日本とロシア両国間の相互理解を強めるために極めて重要であった⁽⁵⁾。

1916年9月2日早朝、東清鉄道の寛城子駅では、閑院宮載仁親王に付き添う任に当たるロシア側代表者、すなわち、ロシア軍部・官部指導層、およびこの日のために編成された儀仗兵が日本代表団を出迎えた。厳かな出迎えの後、閑院宮載仁親王と随員は特別急行列車でモスクワに向けて出発し、10月10日にモスクワに到着した。モスクワで賓客を出迎えたのは、ゲオルギー・ミハイロヴィチ大公とその侍従と儀仗兵、日本大使、モスクワ軍管区司令部、モスクワ市上層部であった。

モスクワ市長M.V. チェルノコフが親王に歓迎の辞を述べた。

「…我々は、ロシアの心臓、モスクワの城壁内で【в стенах Москвыモスクワのクレムリン内】日本の皇族をお迎えすることを喜びとするものであります。予め定められている日程ゆえに、親王殿下が、より身近にまた詳細に、モスクワを知ることが出来ないことを残念に存じます。我々は、ロシアと日本の関係が友好同盟の性格を持つこととなったことを喜びに思います。我々は、戦いの場における兄弟関係が我が同盟【наш союз】を強固にし、たえず、相互に、いっそう解り合い、親しくなることが、我が両国の相互利益に向けた広範かつ緊密な貿易・経済関係確立と極東における揺るぎなき平和に資するものと信じます。親王殿下のさらなる旅のご多幸とご無事を祈るものであり、ロシア社会全体が心からの共感と共鳴の気持ちを以て殿下の旅を見守っております」。

これに対する答礼の中で、閑院宮載仁親王は次のように述べた。

「まさに現在のこの時期、極めて重要な役割を果たしている偉大なる歴史都市・モスクワからの挨拶に対し貴官に感謝する。同様に、貴官が表明されたお気持ちに感謝する。私は、自分の最初のモスクワ訪問について、最良の思い出を何時までも留めるとともに、たとえほんのわずかな時間であれ、再度、モスクワを心地よき満足で訪れる機会があることを願う。両国の友好的関係がかつてないほど強固になったことは、我々にとって極めて喜ばしいものである。我々は、両国民の友情の絆と兄弟としての親交がお互いの利益と人類文明に資することを信じている。表明されたお気持ちに対し、再度貴官に感謝するとともに、貴官の町の繁栄を祈っていることをモスクワ市民のお伝え頂くようお願いするものである。心からのご歓待に感謝する」⁽⁶⁾。

同日午後、日本からの一行は、同じ列車で、皇帝ニコライ二世に拝謁するため、大本営に向けて出発した。

当時モギリョフに置かれていた大本営への閑院宮載仁親王の訪問に付き、最も詳細でかつ信頼できる記述は、大本営からペトログラードに1916年9月11日に発信された電報第353号（ロシア国立歴史文書館所蔵）に見ることができる。その本文が翌日9月12日にペトログラードの新聞『ベチュールニエ・プレーミヤ』【《Вечернее время》「夕刻」】に掲載され、後日他の出版物にも掲載された。以下、原則的に、その電報をそのまま省略せず、すべて引用する。

「9月11日12時半、日本天皇の名代である閑院宮親王が、ゲオルギー・ミハイロヴィチ大公の日本訪問に対する答礼のため皇帝大本営に到着した。皇帝の名において親王を出迎えるため、駅の軍用プラットフォームには、合唱隊を伴ったゲオルギー大隊の儀仗兵が整列していた。ゲオルギー大隊は大本営において、ゲオルギー大公の近衛兵で今次の戦争「第一次世界大戦、チェルニャ

フスキー注」に参加している者から編成されたものである。

その場に参列したのは、セルゲイ・ミハイロヴィチ大公【ニコライ一世の孫、革命で銃殺（1869-1918）】、大本営総司令官であるアレクセエフ一等侍従武官【генерал-адъютант】、3等侍従官【гофмейстер】である外務大臣シチュルメル、同盟諸国軍の代表者たち、大本営付将校たち、知事等であった…。親王の特別列車が到着する少し前、皇帝陛下が皇太子殿下を伴い到着された。皇帝に随行したのは、前の当直侍従武官【бывший дежурный флигель-адъютант】ドミトリー・パヴロヴィチ大公【ニコライ一世の孫。ユスーポフ公と並んでラスプーチンの暗殺者の一人として知られる。（1891-1942）なお、ユスーポフ公は、やはりニコライ一世の孫で、ニコライ二世の妹と結婚した、後出アレクサンドル・ミハイロヴィチ大公の娘、イリーナと結婚】、イーゴリ・コンチタンチノヴィチ公爵、帝室宮内省臨時長官・狩猟長官【временно управляющий министерством императорского двора обер-егермейстер】ニロド伯爵、皇帝本所管理担当官【исполняющий дела командующего императорской главной квартиры】マキシモヴィチ一等侍従武官【генерал-адъютант】、およびその他の皇帝随員たちであった。皇帝は儀仗兵の列の前を歩き、閲兵した。皇帝陛下は日本の最高勲章帯綬を身に付けていた。

12時半、閑院宮載仁親王を乗せた列車が到着した。同乗したのは、モスクワから親王に同行したゲオルギー・ミハイロヴィチ大公、親王と大公に随行した侍従武官モルドヴィノフ、ゲオルギー・ミハイロヴィチ大公宮殿長カホフスキー陸軍大佐、大公の侍従武官エリストフとナルイシキン、および、寛城子から親王の随行役を務めたタチーシチェフ一等侍従武官【генерал-адъютант】とベザク大佐であった。

皇帝陛下と親王は、互いに挨拶を交わし随員と高官を紹介し合った後、儀仗兵の列の前を歩いて閲兵した。軍楽隊が日本国歌を演奏した…。

その後で陛下は親王に大本営付き将校たちと同盟国軍の代表たちを紹介した。それが済んだ後で、栄誉礼を行った大隊は分列行進をして退場した。

皇帝陛下は皇太子を伴い駅を後にし、ご自身の滞在先に向かった。しばらくして閑院宮載仁親王はゲオルギー・ミハイロヴィチ大公と共に…皇帝陛下を訪問するために大本営の方へ移動した。

移動の途中町の住民は親王を歓迎した。家々には日本とロシアの国旗が飾られていた。皇帝が滞在される家の玄関では、帝室宮内省臨時長官ニロド伯爵と帝室宮内財務長官で侍従の任にあったドルゴルーコフ公爵が親王を出迎えた。親王は、広間を通して皇帝陛下のもとに向かったが、その広間には陛下主催の午餐会に招かれた人たちがすでに集まっていた。

親王を引見した際、皇帝陛下は、自ら親王殿下に聖アンドレイ勲章を手渡された。そして、皇帝陛下は親王と皇太子と共に午餐の席に向かった。中央に皇帝陛下が、その右側に閑院宮載仁親王、左側に皇太子が席に就いた。親王の横に外務大臣が、皇太子の横に日本大使・本野子爵が座った。

午餐の席で皇帝陛下は次のような乾杯の辞を述べられた[フランス語で、チェルニャフスキー注]。

「親王殿下のロシアご訪問は、我々両帝国を結びつける友情の絆を強固にしたいとする日本国天皇の願いを改めて証明するものである。この絆は、共通の敵に対する戦いにおける武器供与によって裏付けられているものであり、これを機会に私は、日本陸軍が示した剛胆さと日本海軍の勇敢さに注目することを快く思う。また私は、我が軍に対する武器供与という日本政府が示した厚意を改めて認識するものである。親王殿下におかれてはそこにご滞在中に、我が帝国の日本に対する深い共感を身を以て実感出来るであろうことを確信すると同時に、この心からの友情の気持

ちを天皇陛下にお伝え頂きたい。日本の天皇陛下、皇后陛下のご健康と、日本陸海軍の栄光、ならびに日本の繁栄を祝して乾杯する」。

日本の国歌が演奏された。閑院宮載仁親王は皇帝に対して次のような乾杯の辞で答えた〔フランス語で、チェルニャフスキー注〕。

「皇帝陛下！陛下が私に向けて述べられたご好意に満ちたお言葉に、私は深く心を打たれました。陛下が日本軍に対して表された賞賛のお気持ちは殊に拝聴致したいと存じます。陛下の慈悲深いお言葉が、我が軍全体に喜びを以て迎えられ得るであろうことを私は確信致します。今回のわが訪問に際しまして、陛下が私にお示しになられた素晴らしいご供応に心から感動致します。また、モスクワで私を迎えるために陛下のご名代としてゲオルギー・ミハイロヴィチ大公をご派遣なされた尊いご配慮は、私にとりまして、この上ない喜びに満ちたものでありました。皇帝陛下におかれましては、私の心からの感謝の気持ちをお受け取り頂きけましたと存じます。また、今回の訪問に際しまして、官憲ならびにロシア国民から示されました心からのご共感について、我が天皇陛下ならびに日本国民すべてに正しく伝えることを確約致します。私の今回のロシア訪問が、かたじけなくも皇帝陛下がご指摘なさいましたように、日本国内に深い印象を与えるであろうことを確信致します。我々両国間に存在する相互信頼と真の友情の關係が、武器供与によって神聖なものとなった今、より一層強化されることを指摘し、そのことを幸いに存じます。皇帝陛下、200年以上にわたり何ものにも屈服しない勇敢さと力で戦い、ここ最近においてかくも多くの輝かしい成功を収めた栄光あるロシア軍に、私から心よりの敬意を表させて頂きたいと存じます。私は、ロシア軍の最終的かつ完全な勝利に対する深い確信を限りなき喜びをもって表明致します。皇帝陛下、皇后陛下、皇太后陛下、そしてすべての皇族の方々に敬意を表し、ロシア国家の偉大さと安寧を心から祈り、陛下の御意を得て、私から乾杯させて頂きたいと存じます」。

続いて国歌が演奏された。午餐の後、皇帝陛下は閑院宮載仁親王と共に、皇帝と皇太子のために日本天皇の名において親王が持参した、花瓶、武器、絵画、希少植物などの贈り物が置かれているテラスに向かった。午後、親王は皇族方および大本営司令長官〔начальник штаба Верховного главнокомандующего〕を表敬訪問した。

午後8時、皇帝陛下の居所で晚餐会が催され、閑院宮載仁親王は随員と共に列席した。晚餐会が終わった後、閑院宮載仁親王は皇帝陛下に別れの挨拶をし、ゲオルギー・ミハイロヴィチ大公と共に、午後8時過ぎに大本営から自分たちの列車に向かった。親王を見送るために駅に参集したのは、皇族たち、大本営司令長官〔начальник штаба Верховного главнокомандующего〕、外務大臣、帝室宮内省臨時長官、皇帝本所管理担当官〔исполняющий дела командующего императорской главной квартиры〕、皇帝陛下およびその一族〔их императорских высочеств〕の随員たち、同盟国軍の代表たち、大本営付き将校、知事等であった。見送りに参集した人たちに別れの挨拶をし、閑院宮載仁親王はゲオルギー・ミハイロヴィチ大公と共に列車に向かい、列車は午後10時前にキエフに向けて出発した。閑院宮載仁親王の随員一行には皇帝陛下より勲章と贈り物が下賜された。日本天皇の侍従武官長ウシヤマ〔内山小二郎〕には白鷺勲章が、式部官〔церемониймейстер〕吉田〔要作〕には聖スタニスラフ第一級勲章宝石附が、全権〔大使〕安達〔峯一郎〕と中島〔正武〕大將〔中将〕それぞれに贈り物が、他の随員にも勲章と贈り物が、〔日本側からは〕大本営総司令官と皇帝陛下随員に日本の勲章が、それぞれ下賜された」⁽⁷⁾。〔閑院純仁『私の自叙伝』1966にペテログラードでの写真あり〕

閑院宮載仁親王との会見に際し、ロシア皇族が受けた個人的印象は、皇帝ニコライ二世と皇后アレクサンドラ・フョードロヴナの文通の中に記されている。【以下、2本の書簡と日記の引用に関し「」は訳者】

「皇帝大本営

1916年9月11日

我が愛おしき妃

親愛なる手紙に感謝する。たった今、閑院宮親王と朝食を共にした。親王は好感の持てる人物で、フランス語を上手に話す。彼はかつて1900年にロシアの来たことがある。幸いなことに、今日は晴れて暖かった。彼は赤ん坊〔アレクセイ皇太子、チェルニャフスキー注〕と私に日本の素敵な贈り物を携えて来た。時間がないので手紙はこれで終える。

私の可愛い君と娘たちを固く抱きしめつつ。

永遠に君の

ニキ」⁽⁸⁾

「皇帝大本営

1916年11月12日

親愛なる君の手紙と君の優しさすべてに熱く感謝する。昨日の日本人たちへの応接は素晴らしいものであった。我々は親王を極めて荘厳に迎え入れた。天気も理想的なものであった。昼間ゲオルギー〔ゲオルギー・ミハイロヴィチ大公、チェルニャフスキー注〕は親王と共に馬を駆り【катался】、我々は、建設予定の小礼拝堂の傍の発掘中の場所で彼らを迎えた〔皇位継承者が熱中している考古学的発掘のこと、チェルニャフスキー注〕。

親王は私とアレクセイに天皇および彼自身からの優雅な贈り物を携えて来た。贈り物はツァールスコエ（セロー、チェルニャフスキー注）の方に送るので、箱を開けるよう命じて、品物を見てほしい。中でもいちばん美しいのはcloisonné〔七宝焼、チェルニャフスキー注〕の大きな絵画で、孔雀を描いたおそろしく重いものであるが、見事な出来映えである。

アレクセイは、昨年ここで一緒に遊んだ前の日本の将軍に会えたことを喜んでいた。彼はこの度親王の随員の一人としてやってきたのである（1910年-1911年【1912年】に在サント・ペテルブルグ日本大使館付武官、1915年には大本営での日本陸軍代表であった中島正武のこと、チェルニャフスキー注）である。

ゲオルギーは、子供たちを見守る良き家庭教師のように、彼らを監督している。今日はママ〔皇太后マリヤ・フョードロヴナ、皇帝アレクサンドル三世の妃で、ニコライ二世の母。チェルニャフスキー注〕が、親王一行をキエフで応接することになっている。君も15日に彼らを目にする事ができよう…。⁽⁹⁾

同日夜、皇帝は自分の私的日記の中で次のように書き記している。

「9月11日 日曜日。

今日はめずらしく聖体礼儀のない日曜日だった。報告を受けるために【к докладу】少し早めに出御したが、勲章をすべて付けた礼服を着用していた。12時、アレクセイと共に日本の閑院宮親王を出迎えるために出発した。ゲオルギー大隊からの儀仗兵と大本営全員が軍用ブラット

フォームに整列していた。12時半、列車が到着し、ゲオルギー・ミハイロヴィチ、親王とその随員たちが列車から下車してきた…。親王は1時までプラットフォームにおり、私は彼に聖アンドレイ勲章を手渡した。その後で午餐会が行われ、音楽と乾杯を繰り返した…。一行がその場を経つ際に、私は閑院宮親王とゲオルギーに会った。ボリス【ボリス・ウラジーミロヴィチ大公、1902年6～7月セヴァストポリ号で来日、閑院宮載仁親王に会っている。アレクサンドル二世の孫】の報告を受けた。午後8時に晩餐会、その後、日本人一行は別れを告げ、キエフに向かった。夜は書類に目を通す。」⁽¹⁰⁾

出来事の記述はこのように短く簡潔なものであるが、これはニコライ二世の日記全体に特徴的な書き方である。

大本営で行われた皇帝ニコライ二世との会見と対話が親王のロシア訪問の最も主な出来事となったことは言うまでもない。所定の行事日程に従って、閑院宮載仁親王一行は大本営訪問を終えた後、列車で、厳粛な行事が予定されているキエフに向かった。行事の最も主なものは、日本の天皇家代表と皇太后マリヤ・フョードロヴナとの会見であった。

賓客のキエフ滞在の様子を最もよく伝えているのが、日本使節団の訪問を伝えた新聞や雑誌の報道記事で、それらは当館のフォンドに所蔵されている。

「午後2時30分、閑院宮親王がゲオルギー・ミハイロヴィチ大公と共に到着した。朝早くから町はロシアと日本の国旗で飾られていた。

賓客を出迎えるために、駅には、軍や政府の高官、将軍や提督、行政機関等の代表者たちが参集した。やがて、アレクサンドル・ミハイロヴィチ大公（提督、帝国艦隊航空司令官【1916年には既に空軍総監】。ゲオルギー・ミハイロヴィチの弟、チェルニャフスキー注）が出御あそばされた。【ゲオルギー（1863-1919）もアレクサンドル（1866-1933）もいずれも皇帝ニコライ一世の孫、ゲオルギーは革命で銃殺されるも、アレクサンドルはクリミアから英国軍艦で家族（妻はニコライ二世の妹）とともに亡命に成功。父親はニコライ一世の四男、ミハイル・ニコライヴィチ大公（1832-1909）。弟セルゲイは既出】

ホームには楽隊と共に儀仗兵が整列し、列車の到着を日本式の行進をして【японским маршем】迎えた。

閑院宮親王はゲオルギー・ミハイロヴィチ大公と共に列車から出て、アレクサンドル・ミハイロヴィチ大公および軍管区総司令官ホロドヴィチ陸軍中將に出迎えられた。その後閑院宮親王は儀仗兵にロシア語で挨拶をしながらその傍を通り過ぎ、儀仗兵は分列行進をして親王の通り道を空けた。

市長が…友好大国の代表者に歓迎の挨拶をし、歓待の証であるパンと塩を進呈した。親王は歓待に謝意を表した。

親王は随員と同行の高官を伴って両大公と共に自動車で市内に向かった。

午後3時、閑院宮親王は商人会庭園【сад Купеческого собрания】に到着した。庭園の入口では、ホドロヴィチ大将、国会正規議員（議決権を持っていた議員、チェルニャフスキー注）、市長を始めとした市議会議員、および商人会議員【члены купеческого собрания】が親王を出迎えるために参集していた。

庭園に参集した人々は、やって来た親王を「バンザイ」の叫び声で迎えた【本当に日本語で万

歳と言った模様】。

出迎えに集まった人たちを親王に紹介した後、全員が庭園内に移動した。楽隊がロシアと日本の国歌を演奏した。日本の一行はドニェプル川の切り立った岸の上の広場から川向こうに広がる素晴らしい眺めを堪能した。

その後閑院宮親王は商人会館の冬の間【зимний зал Купеческого собрания】に招かれた。熱帯植物におおわれ、日本とロシアの国旗が飾られた冬の間では茶の接待がなされた。

市長が親王に対し挨拶の言葉を述べ、その中で市長は、他の偉大な国民と共に真の人間文化の擁護を表明した国の代表者である親王殿下にキエフ訪問を賜ったことに謝意を表し、日本の天皇陛下とその名代である閑院宮親王の健康を願って乾杯の辞を述べた。

楽隊が日本国歌を演奏した。

答礼の挨拶の中で閑院宮親王は、市長に歓迎と心のこもった応接に対する謝意を表し、心からの感謝の気持ちをキエフのすべての市民に伝えてほしいと述べた。

皇太子アレクセイ生誕記念教育博物館を訪問した後、閑院宮親王は随員と共に宮殿に到着し、皇太后マリヤ・フョードロヴナの応接を受けた。

宮殿で午餐会が催された。午餐会の後、親王は駅に向かい、10時5分にキエフを発った〔ペトログラードに向けて、チェルニャフスキー注〕⁽¹¹⁾。

日本からの賓客一行を乗せた列車がペトログラードに着いたのは9月14日の午後3時前であった。この記念すべき出来事は、以下に引用するように、当館所蔵文書の中にその記録が残されている。

「2時過ぎから賓客を出迎えるため高官の参集が始まった。来たのは次の者たちである。陸軍大臣シュヴァエフ歩兵大将、海軍大臣グリゴロヴィチー等侍従武官、交通大臣トレポフ、一等侍従武官・ユスーポフ公爵、スマロコフ・エリストン伯爵、ファン・デル・フリト、フッロン、およびノヴォイリツェフ、日本大使館員、ペトログラード軍管区総司令官ハバロフ陸軍中將、ペトログラード軍管区参謀本部長【начальник штаба петроградского военного округа】チャジェリニコフ陸軍少將、宮廷儀典部長官エヴレイノフ、皇帝陛下随員ブドベルグ男爵、ジラフ・デ・スカントン男爵、フォン・ヴォリフ、シェレメチエフ伯爵、さらに、ノスチツ伯爵、ペトログラード特別市長で陸軍少將オボレンスキイ公爵、ペトログラード知事サブロフ、県貴族会長ソモフ侍従、市長、地方自治会代表者たち、その他。

列車が【ツァールスコエ・セローの駅】インペラトルスキー・パヴィリオン駅に到着する数分前に、パーヴェル・アレクサンドロヴィチ大公、キリール・ヴラジーミロヴィチ大公、ニコライ・ミハイロヴィチ大公、イーゴリ・コンスタンノヴィチ公爵が参集した…。2時40分、賓客一行を乗せた列車がホームに入った。特別車両から、日本の礼服を装い皇帝陛下から下賜された聖アンドレイ勲章の帯を纏った閑院宮親王が出て来た。親王に続いてゲオルギー・ミハイロヴィチ大公が…、そしてその後で親王の随員たちが出てきた…。親王と共に日本大使本野【一郎】子爵も到着した…。

儀仗兵を一巡した後、親王は式典部屋に向かい、各部屋で貴族、市、地方自治会の代表者たちから歓迎の挨拶を受けた。

参集者たちの歓呼の中、閑院宮親王と随員は四輪箱馬車と自動車に分乗し、冬宮に向かった。

冬宮の玄関では儀仗兵が整列をしていた…。」⁽¹²⁾

その日の晩、日本大使館で20人分を準備した晩餐会が催され、大使館員とペトログラードに派遣されている日本陸軍武官が招待された。

翌日、閑院宮載仁親王と随行者たちは列車でツァールスコエ・セローに向かい、アレクサンドル庭園でニコライ二世の妻である皇后アレクサンドラ・フョードロヴナの応接を受けた。この時の様子は1916年度の廷室宮内庁六等官の日誌に次のように記されている。

「…親王は、皇后陛下アレクサンドラ・フョードロヴナに拝謁するために新執務室【Новый кабинет】に入り、親王の随員たちは…肖像画の間【Портретная комната】に通された。

拝謁が終わった後、親王は皇后陛下と共に肖像画の間に移り、親王は皇后陛下に自分の随員たちを謹んで紹介した。

肖像画の間から皇后陛下と親王、および招待された人を全員が皇后陛下主催の盛大な午餐会の行われる円形広間【круглый зал ロタンダ】に向かった。…午餐会は午後1時に始まり1時50分に終わった…。

午餐会后、皇后陛下と招待された者たちは肖像画の間に移り、そこでコーヒーとチョコレートが供された。

コーヒーの後、皇后陛下は親王と共に小さな図書の間【малая библиотека】に移動し、親王からの贈り物である日本製のゴブラン織【綴錦】を鑑賞した。

皇后陛下に別れの挨拶をすると、午後2時15分、親王は宮殿を辞し、ツァールスコエ・セローとパヴロフスクに住まう皇族方を訪問するために自動車で出発し、その後、随員と共にペトログラードに向かった。

ツァールスコエ・セローから到着後、親王は、首都に住まう皇族方を、そして友好大国の大使たちを訪問した。

午後8時、日本の親王は随員と共に、閣僚会議議長・シチュルメルのもとで晩餐をとった」⁽¹³⁾
皇后は親王との会見の印象を大本営にいる皇帝との文通の中で次のように伝えている。

「電報第53号

ツァールスコエ・セロー 大本営 1916年9月15日

15時2分 16時12分

陛下

只今日本の親王を接遇。非常に愛想の良い、話し好きな人物…」⁽¹⁴⁾。

1916年9月15日付の書簡。ツァールスコエ・セロー。

「彼〔閑院宮載仁親王、チェルニャフスキー注〕は話し好きで感じの良い人物で、堅苦しさはなかった…。彼は私に日本の天皇からの贈り物として、素晴らしい出来で彩り豊かなゴブラン織を2点私に手渡した。私や母上の歓待に彼は深く感動した。それに、冬宮までの沿道沿いに何と多くの人たちが集まったことだろう…」⁽¹⁵⁾

9月16日朝、親王はゲオルギー・ミハイロヴィチ大公と共に造幣局を訪れ、賓客訪問帳に記帳した。午後1時、ミリオンナヤ通りにある大公の宮殿で午餐会が催され、ロシア側と日本側の高官が大勢集まった。

午餐会の後、親王は冬宮の中のエルミタージュ美術館と皇太子記念病院を訪問した。

午後8時、日本大使館で晩餐会があり、10時に大夜会が催され、ペテルブルグの公人と同時に各国の外交官が招待された⁽¹⁶⁾。

翌日冬宮で公的な午餐会が催され、それが終わった後、親王は露日協会の代表者V.Y. ココフツェフ伯爵に日本天皇の名において、天皇の紋章の入った3つの金杯を贈呈した。晩、レストラン「キューバー【当初の経営者は宮廷シェフであったフランス人、Pierre Cubat】」で、親王に敬意を表して露日協会理事会が主催した晩餐会が行われた。晩餐会の席では、ココフツェフ伯爵と閑院宮親王は互いにスピーチをし、それぞれが洗練された心温まる言葉で両大国間の友好と協力の更なる強化を表明した。晩餐会は午後10時過ぎまで続いた⁽¹⁷⁾。

9月18日午後、閑院宮載仁親王と随行者は、国会での応接の前に、アレクサンドル三世博物館（現・国立ロシア美術館）を訪れ、その後、エカチェリーナ通り（現・シバレルナヤ通り）にある日本赤十字社が組織したロシア人傷病兵のための病院を訪問した。病院で賓客は全室を廻り、教会を訪れ、ロシア語で挨拶しながら傷病兵たちと接した。

晩、閑院宮載仁親王は随員とゲオルギー・ミハイロヴィチ大公と共にマリインスキー劇場でバレエ「せむしの小馬」を鑑賞した。舞台が始まる前にオーケストラによって日本国歌が演奏された。幕間ではロシアと日本および同盟各国の国歌が鳴り響き、客席の観客からは一斉に盛大な拍手が送られた。日本の客人たちは公演が大変気に入った⁽¹⁸⁾。

翌9月19日午後、閑院宮載仁親王と随行者たちは故国に向けて出発した。文書の中では次のように伝えている。

「官房〔宮廷の、チェルニャフスキー注〕は、9月19日月曜日午後3時、日本の閑院宮親王が日本に向かうために皇帝専用駅からベトログラードを出発されたことを謹んでお知らせする」⁽¹⁹⁾。

ロシア皇族を筆頭に大勢の高官、および在首都の外交団のすべての代表者たち、および日本の駐在武官が、日本からの客人を見送った。親王は駅の「インペラートルスイキー・パヴィリオン」ですべての人と別れの言葉を交わし、それから特別車両に乗り込み、列車は極東に向けて出発した。国境まで日本使節団に同行したのは、タチーシチェフ侍従武官長とベザク陸軍大佐であった。

閑院宮載仁親王のロシア訪問は、ロシアと日本両国間の相互関係に肯定的な影響を与えたことにより、両国の上層部においてこの上ない高い評価を受けた。もし1917年にロシアで悲劇的な革命の嵐が起こらなかったならば、このような両国の関係は最も高いレベルのものとなったことであろう。その場合、両国家の運命がどのように形成されたであろうか、また世界の歴史がどのような方向に進んでいったであろうか、これについては想像するしかあるまい。

（翻訳：有泉和子）

注

（1） РГИА. Ф. 530. Оп. 1. Д. 62. Л. 4.

（2） Ф. 530. Оп. 1. Д. 62. Л. 5.

（3） Ф. 530. Оп. 1. Д. 62. Л.Л. 7-29.

（4） Ф. 472. Оп. 50. Д. 1602. Л. 11-14.

（5） Ф. 472. Оп. 50. Д. 1602. Л. 1,40.

- (6) Ф. 472. Оп. 50. Д. 1602. Л. 50.
- (7) Ф. 452. Оп. 50. Д. 1602. С. 22-29, 33-38, 40.
- (8) Переписка Николая и Александры Романовых 1916-1917. Т. V. М., Л., 1927. С. 21-22.
- (9) Переписка Николая и Александры Романовых 1916-1917. Т. V. М., Л., 1927. С. 23.
- (10) Дневники императора Николая II. Т. II. 1905-1917. М., 2007. С. 98.
- (11) Ф. 452. Оп. 50. Д. 1602. Л. 51 об.
- (12) Ф. 452. Оп. 50. Д. 1602. Л. 54.
- (13) Ф. 516. Оп. 1 доп. Д. 21. Л. 18 об., 19.
- (14) Переписка Николая и Александры Романовых 1916-1917. Т. V. М., Л., 1927. С. 28.
- (15) Переписка Николая и Александры Романовых 1916-1917. Т. V. М., Л., 1927. С. 29.
- (16) Ф. 452. Оп. 50. Д. 1602. Л. 56.
- (17) Ф. 452. Оп. 50. Д. 1602. Л. 57.
- (18) Ф. 452. Оп. 50. Д. 1602. Л. 68.
- (19) Ф. 452. Оп. 50. Д. 1602. С. 17.

本研究集会は、基盤研究 S 「マルチアーカイヴァルの手法による在外日本関係史料の調査と研究資源化の研究」(課題番号26220402、研究代表者：保谷 徹)の一環として、その経費の一部も使用して行なった。